

## 学生の里山保全活動の学習支援 —能登町「春蘭の里」での地域貢献活動を通して—

Students' social contribution activity to protect satoyama in Shunran-no-Sato in Noto-cho

石川県立大学 教養教育センター 桑村 佐和子・新村 知子・山岸 倫子

### 1. はじめに

本稿は、石川県能登町宮地にある「春蘭の里」で学生達が里山保全活動のボランティアをしながら、地元の方々と交流を深め、学んだことをまとめたものである。これは、石川県立大学の「ポケットゼミ」の講座「地域おこしの現場を訪ねる」と題して、計2回、2カ年にわたって実施された(注1)。図1はそのときの模様である。



図1 平成23年度ポケットゼミ「地域おこしの現場を訪ねる」参加者

#### (1) 「春蘭の里」とは

「春蘭の里」は、能登町で最も高齢化率の高い瑞穂・宮地地区で、「若者が戻ってくる農村再生」を目標に掲げ、平成8年に地元集落の有志7人により「春蘭の里実行委員会」が結成されたことに始まる。今回の企画は、この委員会で中心的な役割を担い、自身も農家民宿「春蘭の宿」を経営する多田喜一郎氏の協力により実施している。

能登町の山間にあるこの地区は、山菜やキノコ採り

が楽しめる山や水遊びができる川が身近にある。この「当たり前」と思っていた自然の豊かな環境に価値を見出し、恵まれた自然を生かした取り組みを住民有志が主体となって始めている。その方法として、いろいろを設置することと川魚や山菜など地元の食材を使った料理を提供することを条件とした農家民宿を「春蘭の里」と位置づけ、交流人口を増やそうと試みている(注2)。

平成20年度には農林水産省の「立ち上がる農山漁村」の取り組みとして取り上げられ、平成23年度には、国土交通大臣賞、農林水産大臣賞、内閣総理大臣賞、地域づくり大賞を受賞している。また、BBCワールドニュースの「ワールドチャレンジ2011」のファイナリスト12組の1つに、日本で初めて選ばれるなど(注3)、注目度が上がってきている。また、若干名ではあるが、若者が移住してきている。

#### (2) 「春蘭の里」でのボランティア活動のきっかけ

「春蘭の里」へ向う直接的なきっかけは、平成22年度の石川県立大学の地域貢献プロジェクトとして採択された「白山市と輪島市における学びを支援する人材育成のための社会教育プログラム開発」(代表:桑村)で、共同研究者の一人である社会教育主事による紹介である。平成22年9月27日に現地踏査による面接調査で、多田氏に協力いただいた際に、「春蘭の里」での学生達の活動を期待していることを伝えられた。筆者もまた、「春蘭の里」の、困難な状況から道を切り拓く姿勢から学生が学ぶものは多いと考え、学生達にも希望を聞き、実現の運びとなった。当初、教員としては



図2 里山保全活動と、きのこ処理の様子

訪問して話を伺うだけのつもりであったが、学生から、自分たちも役立ちたいとの提案があり、相談の結果、ボランティアとして訪問することとなった。

## 2. 実施内容

第1回は平成22年11月7日(日曜日)に、第2回は平成23年11月12日(土曜日)に実施された。参加者は1~3年生の、第1回は8人、第2回は14名であった。

2回とも基本的には同じような日程で行っているため、ここでは、平成23年度の日程についてのみ述べることにする。大学を午前8時前に大学のバスに乗って出発、午前10時に「春蘭の里」に到着して、午前中は「春蘭の里」のきのこ山の保全活動を行った。昼食は、作業の途中で見つけたきのこをお味噌汁にしてみようなど、山と共に生きる生活がわかるような昼食を用意していただいた。午後は、今回の目的の一つでもあった、平成22年度きのこ山の整備を手伝った場所に行き、作業をした効果を確認したり、別の場所でのきのこ狩りをさせていだいたりした(図2)。なお、常にきのこに詳しい地域の方が同行してくれた。きのこ山の整備をした場所は、小さな松が沢山根づいていて、今後、きのこが育つ環境が整いつつあることを学んだ。大学に戻ってきたのは午後6時を過ぎていた。

その後、学生の一部から、この活動を他の学生にも報告したいとの提案があり、学生達が作成した図3、図4のポスターを大学の各所に掲示した。

## 3. 学生達の感想

平成23年度に参加した学生の感想から、このよう



図3 「地域おこしの現場を訪ねる」の報告ポスター(平成22年度)



図4 「地域おこしの現場を訪ねる」の報告ポスター(平成23年度)

な活動を通して、学生達が何を感じ、学んだかを見つめることにする。

第一に、里山保全の大切さを実感することができたようである。以下は学生達の感想の一部である。

「枝を拾っておくことで、松などの若木が生えやすい環境になるらしい。きのこは若めの木にしかなれないらしい。つまりは枝を拾うことできのこが生える環境を守れると。傷んで食べられないきのこも里山にまいておけば菌糸が残って来年につながる。」

「人の手で森林が消えているのも事実だが、何も手を加えないこともだめだと言うことがわかった。」

「森林が保たれるためには、人の手が必要で、少し手助けすることで森は守られているということ。」

また、そのような活動を続けていくことの困難さやこのような活動を続けることへの意欲が窺われた。

「森林は守る人がいないとだめになってしまうのを実感した。そういう人たちが減っているように感じるため、このような活動に積極的に参加し、社会貢献できて良かった。また、人とのふれあいが楽しかった。(略)なかなかできない経験ができて良かった。来年も参加したい。」

「森は人が少し手助けすることでよりよく続いていき守られていくのかな、と思った。(略)これからは私たちのような世代が里山を守るためにこのようなものに参加して事実を知って、引き継いでいくことが大切だと思った。今日整備したところが来年どうなるのか知りたい。」

「初きのこ狩りで、はじめ全く見つからなかったが、見つかったときの感動が大きかった。里山は大変落ち着く空気だったが、これを守ることはとても大事だと思った。来年も参加したい。」

「久しぶりに山の中に入って、そこにある自然の大切さを実感し、高齢化などが問題になっている地域でのそういった物の保全の難しさを知った。

積極的に大学の私たちのような人が興味を持って参加することが重要だと感じた。また来年も参加してみたい。」

「里山は人の手が加えられていないただの山だと思っていたけど、実際はすごく管理が大変そうだった。きのこもただ採るだけじゃなくて、来年のことも考えて残したりしていて驚いた。春蘭の里の宿はいろいろとか五右衛門風呂とかあって、アットホームな雰囲気泊まってみようと思った。」

第二に、山の中に、食べられる木の実やきのこがあること、その見分け方について学んだようである。

「山の中には本当に食べられる木の実やきのこが沢山あった。きのこ採集のコツ(枯れ葉とかが重なって、膨らんでいるところを狙う)をおそわった。毒きのこの種類も少し覚えた。」

「きのこの種類や調理前の処理。オオギタケ、ユキヤマタケ、アシナガタケなど表面をはいでから食べるものもある。触ってもいけないきのこもある。」

「あまりおいしそうでないきのこが食べられることや、シメジに少し似ているきのこが毒きのこだったことがショックだった。町おこしで様々な賞をもらっているだけあって、春蘭の里全体が良い雰囲気だった。昔ながらの宿の作りがすごく気に入った。」

また来たいし、次に来るときはきのこの勉強を少ししてから来たい。」

「自分が山で見て、絶対食べられない、まずいと思うであろうきのこが実はとてもおいしいとわかって良かった。きのこ狩りだけでなく、山には新しい松が生えてきていたり、見たことない草や花があったり、新たな発見があって、興味がわいた。また来て、お手伝いしたいと思った。」

第三に、「春蘭の里」の方々の生き方に触れ、自分の生き方を考えさせられる学生もいた。

「午前中に働き働いた分昼食をとり、午後に食べ

物を採りに行くという作業を行って、やっぱり働くことは食べるためにしてることだと感じました。普段の生活の中では身の回りに食べ物があふれていて、親が働いて得たお金があって、なんのために今ここで生活しているのかわからなくなってくる。今、私は親のお金で仕事もしないで生活しているので、一生懸命に勉強したり、自分のやりたいことをやったり、何をすべきなのか考えたりしなくては、と思いました。

また春蘭の方々はとても楽しそうだった。きっと自分のやりたいことをやっているからだろうと思った。私も何歳になっても無理だと思わないでいろんなことに挑戦して楽しく過ごしたいと思った。」

#### 4. おわりに

平成 21 年度に、石川県立大学の全学プロジェクト「能登地域の活性化に関する研究」(平成 19~21 年度、代表：高橋強)の一環として実施した、社会教育委員を対象とした質問紙調査によると、地域の人々が大学に期待する社会貢献として「学生の社会貢献活動(ボランティア活動等)を推進する。」は第 1 位である(注 4)。どのような体験からも学生が学ぶことはあると思われるが、大学としては学生にとって成長を促す学び、できれば専門に近い学びを期待したいところである。里山保全活動を学ぶときに継続して同じ場所に出かけることは、自分たちの作業の成果を知ることができるという点で意義が見いだせるように思われる。一方で、移動手段の問題や受け入れ人数の制約から、このような活動を大人数で行うことは難しいのが現状である。様々なメニューの一つとして、継続していけば良いと思われる。

#### 注

1. 「ポケットゼミ」は、県立大学の教員有志と学生が作る、石川県立大学の教育の一環として、単位付与とは関係なく、主に 1, 2 年生を対象とする自

由なゼミである。

2. 東 雅宏「能登町「春蘭の里」による地域活性化の取り組み」『地域の人材育成と生涯学習推進を支える職員一学びと活動のリンクー (2010 年度石川県立大学地域貢献プロジェクト報告書)』石川県立大学教育学研究室、2011 年 3 月、pp.26-27.
3. BBC ワールドニュースはスカパー!等で放送されており、その一つの企画である「ワールドチャレンジ」は世界中の草の根プロジェクト(経済や環境、教育を切り口に、地球にやさしく、持続可能な地域発展をもたらす草の根プロジェクト)から(2011 年は 600 組以上)、12 組のファイナリストが選出される。上位 3 位に入ると、特集が組まれ、世界的に放映される。
4. 社会教育委員に対する調査方法および分析方法については、桑村佐和子、金子劭榮「大学の地域貢献としての生涯学習支援ー社会教育委員の意識調査結果の一考察ー」(日本生涯教育学会論集 31、2010 年、pp. 103-112.) 等を参照。